

られるのは極めて自然であらう。

次に巻十の

大和には啼きてか来らむほととぎす汝が鳴く毎に亡き人念ほゆ

(一九五六)

に見える「亡き人」とほととぎすの聯想も、ここから解けよう。

「もとつひと」といふ啼き声が「故つ人」——それは時として「亡き人」でもあらう——を偲ばせるのである。

(1) 「大事典」ほととぎすの条下に藤沢衛彦氏は一通り各地の聞き方をまとめてゐる。

(2) 北陸地方での「ほつちよかけた おとつとこひし」の例から見ると、「おととこひし」といふ六音節が本来の擬声的なもので、「や」は伝承的に添加されたのではなからうか。

(3) 「もとつひと」「ほととぎた」を「ほととぎす」と並べてローマ字化してみる。

HOTOTOGISU
MOTOTUHITO
BOTOTUKITA

三者ほぼ同一音とらつてゐるから接近してゐるのが見出されよう。

(4) 「君をかけつ」の「君」はうぐひすの擬音である。これは機を見て論じた。

追記 この旧稿を補訂浄書したのち、たまたま武田博士の全註釈十五をひもどいた。すると、巻廿、四四三七の語釈におつて、「カケ

ツツは口に懸けて。霍公鳥の啼き声が、モトツヒトと聞えるので、もとつ人を口にかけてと歌つてゐる」とあり、それにつづいて巻十、一九六二の「本つ人霍公鳥をや」の歌も、鳴声によつて本つ人と冠してゐると述べられてゐる。(全註釈九の巻十、一九六二の解では未だ本つ人を鳴声とする説を説いてはゐない)
博士が私の擬音説と同一の見地に到達してゐるのに一驚した次第であつた。(二九・二・一一)

『爾比多夜麻』歌異説

——地誌的考証による一つの試論として——

尾 関 栄 一 郎

爾比多夜麻 彌爾波都可奈那 和爾余曾利 波之奈流兒良師

安夜爾可奈思母

新田山嶺には著かなな吾によりそり間なる兒らしあやに愛しも
(三四〇八)

右の上野国歌の爾比多夜麻は新田山であり、『和名抄』所載の上野国新田郡新田郷(註)「爾布太」にある山で、現在の群馬県太田市の方にある金山(標高二二・八メートル)の丘陵をいふことは、既に定説化してゐる。この根拠を成したものは『古義』が『此新田山は、外の大山とはつづかずして、孤立の山なるべし、さらば他の嶺

には着かなくといふ意なるべし」といふ地理的推定を歌意から導き出した説である。『代匠記』や『考』が曩にこの二二句を『新田山の嶺に雲がつかぬ』と、いさゝか挾雜物を介入せしめて解義したのとは、この兩齣を判然と知ることが出来なかつたためであつた。この点については、雅澄の歌意を通しての地形推理は一步前進したところであつたといへる。雅澄の所謂『他の大山』とは八王子山系の最北端にあたる広沢山塊であり、この山系に在つて、然も広沢山塊につづかず孤立した新田山が現在の金山だといふところに歌意の解釈が定着して來たのである。即ち『古義』には『新田山の、外の高嶺にも着かずして、ただ孤立であるごとく、心は我に依ながら、親く依畢たるにも非ずして、猶間にある児等が、あやしきまで、さても愛憐しや』と解釈されてある。

この歌の解義も一応定説化したところであらう。尤も今日においてもなほ『代匠記』や『考』の解義に拠つた一二句の解による歌の解義は行はれてゐる。

さらにこの歌謡に問題となるものは第二句の否定助動詞であらう。即ち都可奈那(著かなな)といふ東国語独自の助動詞の解釈である。いまこの歌の二句の奈那について、従来の解釈をみると、大別して二様あるが、主な文献について列記すると――

- 『仙賞抄』 ツカブシテ
- 『管見』 つけなく
- 『代匠記』 付な(那ハ助詞)
- 『略解』 つかなく(の訛)
- 『古義』 不着カ
- 『解』 つかなな(願望)

『論究』 附かじカ

『新考』 附かずして

『総釈』 つかなで―つかで

『全釈』 つかなく

『通釈』 着かずして

『全註釈』 つかないでゐるものだ

これらを見ると、『仙賞抄』はじめ『略解』『古義』『新考』『総釈』『全釈』等は大体において一致して連用形助動詞にとつてをり、『全註釈』『論究』『解』は奈那の「那」を願望を表す助詞にとつてゐる。然しこの歌に關する限り、広沢山が新田山に附いてゐない地形は、この国のこの歌謡の作者にとつては既知のことなのであつたらうから、願望としてこれを表現するといふことは考へられない。矢張り「つかずして」「つかないで」位の意と解される。

これについては佐佐木信綱博士の『万葉辞典』に次の如く出てゐる。

(一) 上の『な』は完了、下のは希望。てしまはうよ。

(二) 東語。ずして。ずありつつ。一説、上の『な』は打消。下のは希望を表す。しないでおかうよの意。

そして(二)の東語の場合の例歌として卷二十の武蔵国防人物部広足作『我が門の片山樺まこと汝我が手触れなな地に落ちもかも』(四四一八)と、同じく卷二十の同国防人の妻服部女作『我が夫を筑紫へ遣りて愛しみ帯は解かななあやにかも寝も』(四四二二)が挙げられる。

また『評釈万葉集』卷五に於て、佐々木博士は辞典の説明を更に一步進めて、『上のなは打消の助動詞「ぬ」の未然形、下のなは、

その反復とも、助詞「に」の転とも見られる」と説かれ、卷二・一四の但馬皇女の「秋の田の穂向によれる片縁に君によりな言痛かりとも」と厳に区別して居られる。即ちこの但馬皇女の歌の場合（正本）は『上のなは、確言する助動詞、下のなは、希望意志をあらはす助詞』なのである。

また奈那の終止形は『なふ』で、『伎波都久の岡の葦菲わが摘めど籠にも満たなふ夫と摘まさね』（三四四四）や『伊香俵世欲可中次下おもひどろくまこそしつと忘れせなふも』（三四一九）にも出て来るが、この活用については、豊田八十氏は

未	然	連	用	終	止	連	体	已	然
な	は	な	は	な	ふ	な	へ	な	へ

であらうとし、連用形については、『もと「なひ」であつたのが、「なに」に転じ、更に「なな」に転じたのではあるまいか』としてゐる。そしてその連用形の用例として、抄出した歌の中に三四〇八及び三四三六の奈那も記録してゐる。そして『これらの「なに」「なな」は、いづれも「ずして」の意であるから、連用形であることが明であつて、「高き嶺に雲のつくのすわれさへに君につきな高嶺と思ひ」（三五二四）の「なな」とは、全く別である』として、明らかに願望を表す助詞「な」と区別してゐる。

また『古義』に源流が求められるやうな解釈によると新田山と『間なる児ら』とが語法的には同格名詞となり、然も一首の意が一貫性を欠いて、極めて釈然とせざる歌意を与へることに甘んじなくてはならなかつた。そこで『全釈』の如く、一二句の連関に『新田

山ガ他ノ嶺ニハツカナイデ、孤立シテキルヤウニ」と譬喩の意を潜在させなくてはならなくなる。譬喩表現は東歌には極めて多いが、本問題歌のかかる一二三句の語法に譬喩の意を補足して解するのは、いささか強引な解釈となる嫌ひがあらう。

私は、従来、『古義』の説に従つて来た。然しそれは、語句の訓話註釈本位の、且つ極めて主観的にすら走つた『代匠記』の解釈から前進した地形推理の点に敬服してのことであつた。

然し、こゝ数年來、金山とその周辺の地形を観察しつつあつて、つひにこの解義に服し難くなつたのである。

この地図にみると、山田、新田の郡境は広沢山塊の中央より西北より東南に走り、金山の東部を通つてゐる。そして写真にもみると、二里にわたる屏風形の広沢山塊と、金山とが、中断するところに円墳形の五十米の丘山がある。これはその形状から丸山と通称されてゐる。私は、はじめこの小丘を古墳と思つてゐた。然し考古学上それは否定されてをるところで、秩父古生層に属する硯岩（Ony-stone chert）から成る小丘である。ところが、従來の解義のいづれにも、この小丘の極めて顯著な存在は無視されてゐた。

広沢山、丸山、金山のこの位置は極めて興味ふかい。そしてこの鼎立せる三つの山の姿を複雑な男女の關係になぞらへて、主嶺広沢山を基にして三四〇八の如く歌つたものが、こゝらの民謡となつたものと考へられるのである。即ち——

新田山の嶺（金山）にはつかないで、私（広沢山）に寄りそつて
（間）ある間なる児（丸山）があやしきまでいといといと。

この三つの山名をこゝにそのまま取入れることは一首構成の上からも無理であり、従つて、主嶺を中心にして歌ひ、対立した男の中に

ある丸山を冠する語によつて愛情の対象としたと考へられる。

卷一の長歌(一三)及びその反歌(一四)にある中大兄皇子の大三山(三)の歌で、香山が耳梨山と畝傍山を争ふ古伝説が取入れられてあることに徴して、この新田山の歌も類似構想によるものとして肯定されまいか。

また、従来、初句は諸説悉く二句の主語とされて来た。わづかに『論究』が『新田山(の)根と』つづけて解してゐるのと、『全註釈』の如く、初句を『新田山のやうに』といふ譬喩の意を含ませて、二句を本歌謡の作者自身の心意表現としてゐるものもある。

初句から二句への新田山(の)嶺といふ風に連体格助詞の省略された形は、東歌中、特に上野国歌に三四〇四、三四〇六、三四〇七以下七首の用例があり、下野国歌(三四二四・三四二五)や遠江国歌(三四二九)にもある。

また『禰』は『嶺』で、この場合、山頂ではなく山全体をいひ、『禰爾波都可奈那』は、新田山には附かないで、即ち新田山から孤立してゐる丸山の位地を描写した句とみることが出来る。

こゝにおいて、この歌は新田山そのものの歌でなく、この三つの山の地形の妙に取材して、いづれとも本心をみせぬ乙女を象徴的に歌つた民謡だとみることが出来る。

従来、の解釈に、何か釈然とせぬものがあつたことは、武田博士も『相当に複雑な内容を歌つてゐる。譬喩と主文との関係が、やや離れてゐるやうだが、それだけに複雑な気もちなのだらう』(全註釈)といはれてゐるところあたりにも何ふののではないか。更に佐佐木博士も本歌謡を従来、の解釈による場合の「評」として「言葉が足らず、句法が晦渋になつてゐる……」とされて居られるところにも、

博士が従来、の解釈をなほ全面的に受入れてをられないとも考へられる。即ち従来、の解釈は新田山(金山)とその主嶺(広沢山)のみをこの歌の題材として、その中間に位置する丸山を無視してゐたところに無理があつたと考へられる。実景写真及び地図によつて示した三つの丘陵の地位に従つて、この歌の解釈を新たに施すことによつて、従来、の釈然とせざるものは払拭されるのではあるまいか。

志良登俣布 乎爾比多夜麻乃 毛流夜麻能 宇良賀礼勢奈那
登許波爾毛我母

白遠しら、はるか新田山の守山のうら枯れせなな常葉とほはにもがも(三四三六)

さらに『小新田山の守山』の守る山は山守の居る山とか、禁足の山といふ風に解されて来たが、これは既に『名跡志』が指摘してゐるやうに、この丸山をいふものと解される。そして小新田山の、『乎』は『乎つづば』の『乎』のやうな単なる羨頭語ではなく、新田山と対比して愛称的に附した minor の意の接頭語で、丸山と同格の名詞とみることが出来るのではないか。これについてはさらに考証を進めたいと思つてゐる。いまは筆者の自己課題とし、仮説として一応附記しておく。

(註一) 新田郷は強戸村、鳥之郷村、太田町にあたるべし(大日本地名辞書)、即ち現在の太田市、強戸村及びその北辺。

(註二) 桐生市南端広沢町にあつて、東南より西北へ二里にわたる丘陵、その高峰は茶白山(二九三・九メートル)と云ふ。

(註三) 沢瀉久孝博士『万葉集新釈』

(註四) 直香は別に、『禰にはつかかな』を『寝にはつかかな』の縁語としてゐる。

(註五) 『全註釈』はこの二首の奈那についても亦、『上のナは打消の助動詞ヲの未然形、下のナは、願望の助詞』としてゐる。

(註六) 『評釈万葉集』巻一・一一六頁。

(註七) 『万葉集東歌の研究』一一二頁。

(註八) 「何ぜといへか真に逢はなくに真日暮れて夜よなは来よかに明けぬ時とき来る」(三四六一)

(註九) 『評釈万葉集』巻五・二六八頁。

万葉集枕詞と植物について

松 田 修

このたび創元社から発行された万葉集講座は、近來にない快著で、万葉學徒を裨益する処多大であるが、この第二巻に、「万葉集枕詞全釈」がある。集中にある枕詞を解説したもので、文献としても頗る貴重なものである。私は植物を専攻としてゐるので、いつでも、どの本でも第一に、目にとまるのは植物のことで、この「全釈」を読んでゐる中にも、枕詞と植物の關係について考へてみた。即ち、一、枕詞として使用されたものの中に植物はどんなものがあるか、二、どんな關係で枕詞となつたか、三、植物學的にみて枕詞の解説が妥当であるかどうか、といふやうな關係についてである。これらについて、少しく私見を述べてみたいと思ふ。

第一に、この「全釈」に万葉集枕詞として取上げてゐるものは、四三〇の多きに達してゐるが、この中植物に關係あるものは、草本類二四、木本類二五、竹類三、合計五二で次の通りである。

草 本 類

- 1 あかね(あかねさす)
- 2 あさ(打麻を、續麻つづまなす、夏麻引く、麻裳よし)
- 3 あさがほ(あさがほの)
- 4 あし(蘆垣の、蘆が散る、葦のうれの、葦の根の)
- 5 かきつばた(かきつばた)
- 6 くず(葛の根の、つめさはふ、夏葛の、延ふ葛の、真葛延ふ)
- 7 くれなる(紅の)
- 8 とも(刈藪の、藪疊、真藪刈る、弱藪を)
- 9 すげ(菅の根の、真菅よし、白菅の、在間菅)
- 10 すゝき(はたすゝき)
- 11 たで(水蓼、八穂蓼を)
- 12 つきくさ(つきくさの)
- 13 つぎね(つぎねふ)
- 14 ところづら(ところづら)
- 15 なのりそ(なのりその)
- 16 なのはり(なのはりの)
- 17 ねばたま(ねば玉の)
- 18 はぎ(秋萩の)